Trichilemmal carcinoma

Trichilemmal carcinoma：自験 8 例の報告と本邦例における病期と予後について

鳥居 靖史* 川原 繁*
高田 実* 広根 孝衛*

Summary

最近10年間に金沢大学皮膚科において観察した浸潤性 trichilemmal carcinoma 8 例(男性 3 例, 女性 5 例)の臨床所見, 治療および経過を報告した。2 例がステージ I, 5 例がステージ II, 1 例がステージ III で, 前 2 者の群では切除後再発や転移は認められなかったが, 後者の症例では 2 年後肺転移を生じて死亡した。なお, 本邦報告例 24 例の治療前のステージと治療後の経過を調査した結果, 治療後の再発や転移はステージ I 群では認められなかったが, ステージ II 群では 11% に, ステージ III 群では 50% に生じたことが明らかにされた。

緒 言

Trichilemmal carcinoma (TC)¹⁾は外毛根鞘への分化を示す毛包癌であり, その報告例は近年増加傾向を示してきた。ここでは, 1981年から1990年までの10年間に金沢大学皮膚科において観察した 8 例の TC を報告する。これらの症例はすべて腫瘍細胞の真皮内浸潤を示すものであり, 表皮内癌は含まれていない。

症 例

1. 臨床像 (表 1)

症例は男性 3 例, 女性 5 例で, 初診時年齢は 65 歳から 91 歳 (平均 80.0 歳), 発症から受診までの期間は 2 ヶ月～15 年であった。腫瘍の発生日

位は頭部 3 例, 顔面 2 例, 背部 1 例, 下肢 2 例であった。腫瘍の多くは表面がびらんまたは潰瘍化した紅色の結節であった。1 例 (症例 8) において初診時に領域リンパ節転移が認められた。なお, 全例において本腫瘍以外の皮膚癌や他臓器癌の合併は認められなかった。

2. 治療および経過 (表 2)

8 例中 7 例において外科的切除を施行した。切除時のマージン幅は 1～2 cm としたが, 1 例 (症例 7) では臨床的に脂漏性角化症と診断したため 0.5 cm のマージン幅をとり切除した。全例において病理組織学的に切除標本の断端に腫瘍細胞は認められなかった。なお, 2 例 (症例 1, 4) では生検で有棘細胞癌と診断したため切除前にペブロマイシンの全身投与または油性ブレオマイシンの局注を行ったが, 臨床的にも組織学的にも効果は認められなかった。切除例では治療後再発や転移は認められなかった。

残りの 1 例 (症例 8) は既に一度報告した症例²⁾であるが, 初診時に額の原発巣と左耳前部

* Yasushi TORII, Shigeru KAWARA, Minoru TAKATA, Takae HIRONE: 金沢大学皮膚科学教室

表 1. 自験例の臨床像

症 例 No.	年齢・性	原 発 巣			領域リンパ節転移
		部 位	大きさ (mm)	肉 眼 形 態	
1	69・女	左側頭部	30×31×7	紅色の潰瘍化結節	—
2	89・女	左眉毛部	15×10×3	紅色の潰瘍化局面	—
3	83・女	右 足 背	22×22	紅色の茸状腫瘤	—
4	91・男	右 頰	30×20	紅色の潰瘍化局面	—
5	76・女	頭 頂 部	25×45×45	紅色の茸状腫瘤	—
6	85・男	右 大 腿	22×20	紅色の潰瘍化結節	—
7	65・男	背 部	17×17	一部暗褐色の潰瘍化結節	—
8	90・女	額	80×50	紅色の茸状腫瘤	+

表 2. 自験例の治療および経過

症例	外科的治療		化 学 療 法	放射線治療	経 過
	マージン (cm)	リンパ節郭清			
1	1	—	PEP 10mg×6	—	8年後再発なし
2	1	—	—	—	6年後再発なし
3	1.5	—	—	—	5年後再発なし
4	1	—	BLM 5mg×6	—	7ヵ月後死亡(老衰)
5	2	—	—	—	3年後再発なし
6	2	—	—	—	2年後再発なし
7	0.5	—	—	—	6ヵ月後再発なし
8	ND	—	—	+	2年後死亡(腫瘍死)

PEP, ペプロマイシン; BLM, ブレオマイシン

のリンパ節転移が存在し、高齢患者であったため原発巣と転移巣に電子線照射を行った。放射線治療により原発巣も転移巣も消退したが、4ヵ月後に左頸部リンパ節転移が、6ヵ月後に右頸部リンパ節転移が生じた。これらの転移巣に再び8MeV電子線(それぞれ18Gy, 16Gy)と $^{60}\text{Co}\gamma$ 線(40Gy, 36Gy)の照射を行い、いずれも消退した。しかし、初診より2年1ヵ月後に肺転移が多発し、呼吸不全により死亡した。

考 察

UICC規約³⁾では、TCを含む皮膚付属器癌の病期分類には非黒色腫皮膚癌のTNM分類およびステージ分類が適用される。この分類に従うと自験8例は表3のように分類される。結果として、ステージI・IIの症例は再発および転

移を生ずることなく治癒したが、ステージIIIの症例は遠隔転移を生じて死亡した。そこで、本邦報告例のうち初診時の原発腫瘍の大きさ、所属リンパ節転移の有無、遠隔転移の有無および手術後の経過が記載されている症例についてステージ別に再発および転移の有無を調べた。表4は必要事項が記載された24例(自験8例を含む)^{4)~19)}の一覧であり、表5はそのまとめである。観察期間が種々であるけれども、ステージIの群では再発や転移が認められず、ステージIIの群では11%(1/9)に、ステージIIIの群では50%(5/10)に手術後局所再発や転移を生じたことが明らかにされた。このことから、他の皮膚悪性腫瘍にけると同様に、TCにおいてもステージは治療法決定の重要な要素であり、また予後と密接な関連性があることが示された。

- の1例. 日皮会誌, 96:1047, 1986.
- 11) 相馬良直, 染谷 通, 五十嵐敦之, 他:リンパ節転移をきたした Malignant Trichilemmoma の1例. 皮膚臨床, 29:381-384, 1987.
 - 12) 荒 政明, 渋谷真理子, 松本光博, 他:リンパ節転移を伴った Trichilemmal Carcinoma の1例. 臨皮, 41:893-896, 1987.
 - 13) 小林まさ子, 藤田 優, 寄藤和彦:Trichilemmal Carcinoma の2例. 臨皮, 42:747-750, 1988.
 - 14) 桧垣修一, 斎藤明宏, 高橋省三, 他:Malignant Trichilemmoma の1例. 日皮会誌, 98:1141, 1988.
 - 15) 川村邦子, 三浦貴子, 上田宏一, 他:リンパ節転移を伴った Malignant Trichilemmoma の1例. 臨皮, 43:1033-1037, 1989.
 - 16) 久本和夫, 山本俊比古, 高田一郎, 他:下口唇に生じた Trichilemmal Carcinoma. 皮膚臨床, 31:217-220, 1989.
 - 17) 川名智子, 藤澤裕志, 星野 稔, 他:Trichilemmal Carcinoma の1例. 皮膚臨床, 31:214-215, 1989.
 - 18) 木花いづみ, 石河 晃, 生富公明, 他:Trichilemmal Carcinoma の1例. 臨皮, 43:971-974, 1989.
 - 19) 竹重量子, 伊藤雅章, 田沢敏男, 他:急速に進行した Trichilemmal Carcinoma の1例. Skin Cancer, 5:63-67, 1990.